



Title	「それが」とテキストの構造：接続詞と指示詞の関係に関する一考察
Author(s)	庵, 功雄
Citation	阪大日本語研究. 1996, 8, p. 29-44
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/12320">https://doi.org/10.18910/12320</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「それが」とテキストの構造<sup>\*1</sup>

——接続詞と指示詞の関係に関する一考察——

*Sore ga and the Structure of Text:*

——Notes on the Relationship between Conjunctives and Demonstratives in Japanese——

庵 功 雄

Isao IORI

キーワード：「それが」， 結束性， 予測裏切り， テキスト的意味の付与，  
指示性 (referentiality)

## 0. はじめに

日本語のテキストの分析に際し， 接続詞は指示詞と並んで重要な役割を果たすものである。また， 接続詞の中には， 次の(1)に見られるように， 指示詞から派生したと考えられているものが多い。しかし， 両者の関係を論じたものは少ないように思われる。本稿では， 「それが」 という語を中心に， テキストの解読における接続詞の役割を考えると共に， 接続詞と指示詞の関係についても考えてみたい。

(1) 「デハ」 や「ナラ」 は「ソレデハ」「ソンナラ」 から出てきたように思われる。「ソレ」 が残っていても消えていても意味がほとんど違わないところを見ても， それが代名詞離れしていることがわかる。(三上 (1955:183))

## 1. 問題のありか

浜田 (1993) は次のような「それが」を逆接の接続語として位置づけている ((2)(3)は浜田 (1993) より)。

(2) 佐藤：それでもうこわくてこわくて， ご飯もノドを通らないの，

もうやせて、眼ばかりギラギラして……。

うつみ：東京にお家がおありになるのに。

佐藤：それがなぜか帰らないの。とらわれたとしか思えない。

(3) 君津製鉄所の粗鋼生産量が、年間900万トンで最大であった73～74年当時、社員は7000人を越えていた。それが、今は5500人に減少。現在の人員の7割は付帯業務関係で、この部門の省人化は、さらに進められようとしている。

浜田（1993）は接続語「それが」の性質を詳しく論じているが、その中でも特に重要だと思われる的是「それが」が(3)のような「継続的変化」の文脈に頻出するという点、及び、「それが」が「物語性」（「話し手が自分の知っていることがらを物語を聞かせるように順序よく提示しているという意味特性」（浜田（1993）））を持っているという点であると考えられる。

本稿も基本的に浜田（1993）の分析に賛成するが、その上で「それが」の意味特性を次のように規定する。

(A) 「それが」は「予測裏切り的関係」を表示する接続詞である。

「予測裏切り」とは、先行文脈から予測されることと対立する内容を述べるということである。(4)を考えて頂きたい。

(4) (a) 冷戦時代は、キューバからの亡命者は自由の戦士ともてはやされ、米国の市民権を与えられた。(b) それが、いまはすっかり邪魔者扱いである。（週刊朝日 1994. 9. 23）

この例では、(4) a. を読んだ／聞いた段階で、読み手／聞き手は「キューバからの亡命者は今も自由の戦士として厚遇されている」といった予測を持つ。この予測は(4) b. 文において裏切られることになるが、「それが」は文頭にあってそのことを先触れする機能を担っている、と考えられる。

さて、以上は基本的に浜田（1993）の成果であるが、それに基づいてここで考えたいのは、なぜ、「それが」という形式が「予測裏切り」という意味特性を担うことになるのか、ということである。それを考える過程で、接続詞と指示詞の関係についても考えてみたい。

## 2. 「それが」とテキスト的意味

### 2-1. 「そのN P」とテキスト的意味

1では「それが」が「予測裏切り」的関係を表すということを見たが、こうした関係を表示する形式が他にもあるのである。それは、(5)～(7)のような環境で用いられる「その」である。ここでは、このタイプの「その」の性質を考えることを通じて、本稿のテーマの一つである、なぜ「それが」が「予測裏切り」という関係を表すのか、という問題を考えていく（なお、以下、#は非結束性 (incohesiveness) を表す。これは單一文としての不適格性を表す非文法性 (ungrammaticality) とは異なる概念だが、結束性を含む「文を越える文法」(仁田 (1977)) の研究では極めて重要な概念である。また、ϕはその位置に要素がないことを表す）。

(5) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その／#この／#ϕ順子が今は他の男の子供を2人も産んでいる。

(6) 古田：実はそれがし、一度は酒を止めようと女房共々愛宕神社に詣で断酒を誓いました。その（／#この／#ϕ）私が思ひがけなくお台所奉行を命ぜられ利き酒を。（中略）〔お台所奉行は〕この私には、古田八太夫にはとても、とても勤まりかねます。（「十時半睡事件帳」1994. 12. 2放送分）

(7) やがて、米国が世界的な影響力を持つ国として舞台に上がる。  
(中略) 米国文明の所産である自動車は、世界各国の人々にもてはやされ、広まった。いまや日本、ドイツ、そして各国が質のよい自動車をつくり、米国内でも売る。  
その（／#この／#ϕ）米国で、自動車業界の成績が思わしくない。大規模な人員削減が報じられる昨今だ。米国社会と自動車の発展の歴史を考えると、いわば本家だからこそ感じているに違いない、やるせなさが、わかる気もする。（天声人語 1992. 1. 8）

これらの例では、先行文脈と「そのN P」を含む文との間に予測裏切り的な意味関係がある。例えば(5)について考えてみよう。

(5) (a) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。 (b) その／#この／# 順子が今は他の男の子供を2人も産んでいる。

(5)' Xが今は他の男の子供を2人も産んでいる。

(5) a. を読んだ／聞いた段階で読み手／聞き手は「順子が他の男と結婚するはずはない」といった予測を持つ（予測が文字通りにこれと同じである必要はない）が、この予測は(5) b. で裏切られる。他の例も同様である。ここで、このタイプの「そのNP」は次のような特徴を持つ（cf. 庵（1995a, 1995d））。

(B) a. 「この」「ゼロ（ $\phi$ ）」に置き換えられない。

b. 先行詞は多くの場合、固有名詞か総称名詞である。

c. 通常「は」ではなく格助詞（多くは「が」）\*2でマークされる。

d. 通常文頭に位置する。

これらの性質は「その」の性質に由来すると考えられる。そこで、それについて考えるために、(5) b. を抽象化した(5)'について考えてみると、この文が先行文脈と結束的になるためには、Xが「他の男の子供を産むはずがない」といった属性を持っていなければならないことが分かる。即ち、Xは単なる「順子」では不十分で、「あなたなしでは生きていられないと言っていた」順子でなければならない。ここで、この下線部のような、定情報名詞句（テキスト内で2回目以降に現れる名詞句。この例では「順子」）にテキスト内で臨時に付される属性のことを「テキスト的意味」と呼ぶことにすると、次の一般化が得られる（cf. 庵（1995a, 1995b））。

(C) 「その」は先行詞を「（定情報名詞句への）テキスト的意味の付与」という観点から捉えていることを示すマーカーである\*3。

## 2-2. テキスト的意味の付与と予測裏切り性

2-1では、（義務的な）「テキスト的意味の付与」と「予測裏切り」という意味内容が相關することを見たが、ここではこのことの理由を考える。

## 2-2-1. 無標の文脈と有標な文脈

先に1で「それが」が用いられる文脈が「予測裏切り」的なものであることを見た。本稿ではこの文脈が「有標な文脈」であると仮定する。この仮定の根拠は次のようなものである。

まず、寺村（1987）の考察を取り上げる。寺村（1987）は(8)を（最初は全文を示さずに）「その先生は」「その先生は私に」「その先生は私に国へ」という順に提示して、その後を思いつくままに続けて文を完成させるという実験を行い、「その先生は」の段階では極めて多様であった予測の範囲が、「その先生は私に」の段階で既に「伝達を表す動詞／くれる」の「過去形」で終わる文に収斂していくという結果を得ている。

(8) その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であった。（夏目漱石「こころ」）

これは文の聞き取りに際し日本語母語話者が文法的知識に基づく予測を行っていること、及び、井上ひさし（1995）『ベストセラーの戦後史Ⅰ』（文藝春秋社。182ff.）等の言う日本語の文末決定性が実際には日本人の談話処理にとって欠陥にはなっていないということを示唆している（もちろん、日本語には統語的には文末決定的であるから、「一緒に行かないこともないわけではない…」といった表現も可能だが、これは非協調的な有標の場合である。ここで重要なのは、日本語母語話者がそうした場合を通常（無標の場合）想定していないということである。こうした仮定は関連性理論の主張（cf. Sperber & Wilson (1986)）とも符合すると思われるが、これに関するさらに深い考察は今後の課題としたい）。

さて、以上で单一文レベルでの「予測」の働きが明らかになったと思われるが、先に行った、「予測裏切り的文脈は有標な文脈である」という仮定はこのことに照らして考えればさほど無理なものではないと思われる。即ち、单一文だけではなく、文連鎖にも何らかの予測が存在すると仮定するのである。この予測と一致するのが所謂「順接」であり、それと反するものが「対比」ないし「逆接」であろう\*4。

対比／逆接という文脈の有標性を示す今一つの現象は次のようなもので

ある。(9)を考えて頂きたい。

(9) 今朝、太郎が朝ごはんを食べた。

(10) 鯨は哺乳類だ。

(9)は「人が朝、朝ごはんを食べる」という一般知識に合致しているという点で通常は情報量が少なく、発話される動機付け (motivation) が少ないと考えられる<sup>\*5</sup> (なお、(10)のような総称文はその意味内容が知識データベースに登録されている (可能性が高い) という点で発話の動機付けはより少ないと考えられる<sup>\*6</sup>)。しかし、(9)も(11)のような文脈でなら使われても不自然には感じられないであろう。

(11) 太郎は朝寝坊でめったに朝ごはんを食べない。

つまり、(9)が自然な文として使われるためには、(11)のようなそれと対比的な文脈を設定する必要がある。そして、そのための簡易な方法が「太郎」に「テキスト的意味」を付与して次のように述べることなのである。

(12) 太郎は朝寝坊でめったに朝ごはんを食べない。今朝、その太郎が朝ごはんを食べた。

なお、予測裏切りの有標性は市川 (1978) の指摘する次のような現象からも示唆される。市川 (1978: 72ff.) は接続語句の省略可能性をアンケートで調べているが、それによると「そして」等の順接の接続語は省略してもよいという回答が相対的に多いのに対し、逆接の場合は省略できるという回答の割合が低く、浜田 (1993) が「それが」と同様に物語性のある接続詞とする「ところが」は最も低い (省略可能とした人は 5 %のみ)。文連鎖間の意味関係が予測可能 (無標) である程、接続語句は省略しやすくなると考えられる<sup>\*7</sup> ので、この現象からも予測裏切り的な文脈は有標であると言えよう。

## 2-2-2. 有標な文脈と有標な現象

2-2-1 では「予測裏切り」という文脈が有標であるという仮定を提示した。ここではこの仮定を裏付ける統語現象を見ておく。

先に 2-1 で「その N P」を含む文が予測裏切り的意味関係を表す場合

があることを見た。その条件の中に、(ア)「その」が省略できない、(イ)「そのNP」が「は」ではなく格助詞（及び「さえ」「も」等の「は」以外の取り立て詞）でマークされる、ということがあった (cf. (B)a, c.) が、この現象は共に有標なものであると考えられる。

それは、(ア)について言えば、文脈上の問題から「この」ないし「その」の使用が義務的になるのは、上述の予測裏切り的な意味関係を表す場合に限られるからである\*8。

次に(イ)が有標な現象であることを見るために再び(5)を考えてみよう。

(5) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。(a) その／#この／#順子が／??は今は他の男の子供を2人も産んでいる。

(B)c. でも見たように、こうした「その」の使用が義務的な「そのNP」は通常「は」以外でマークされる (cf. 庵 (1995d))。一方、(13)(14)から分かるように、テキスト内で2度目に現れる名詞句は（少なくとも主格の場合は）「は」でマークされる。

(13) 昔々ある所におじいさんがありました。おじいさんが／は山へ柴刈りに行きました。

(14) 日本で一番大きな湖は琵琶湖です。琵琶湖が／は京都府の東の滋賀県にあります。(野田 (1985))

以上のことから、定情報名詞句の無標のマーカーは「は」であり、それ以外には有標であることが分かる。ではなぜそうした有標性が見られるのかということだが、これは、こうした場合、定情報名詞句は外延的には定かつ旧だが、命題内容が（先行文脈から形成される予測を裏切るという意味で）新であるために、内包的には新として扱われており、そのことが定情報名詞句のデフォルトのマーカーである「は」の使用をキャンセルしている、ということではないかと思われる。

以上の議論から次の二点が明らかになった。即ち、(a)「予測裏切り」は有標な文脈である、(b)「その」による定情報名詞句への義務的なテキスト的意味の付与は有標な現象である、ということである。本稿ではこの二点

から次のように結論する。

(D) 予測裏切り的文脈は、先行文脈からの義務的なテキスト的意味の付与の結果生じる。

### 2-3. 「それが」と「そのNPが」

ここで「それが」に戻ると、以上の議論から「それが」の持つ予測裏切り性はテキスト的意味の付与によることが分かる。即ち、「それが」の中の非指示的 (non-referential) な「それ」の部分には先行文脈からのテキスト的意味の付与があり、そのことによって「それが」は予測裏切り性を持つのである。ここで次に問題したいのは、「それが」と「そのNPが」はどう違うのか、という接続詞と指示詞の違いである。

両者の違いについて考えるために、接続詞を次のように規定する。

(E) 接続詞は次のような性質を持つ語である。

#### (テキスト的機能)

- 複数の文が文連鎖間の連鎖的 (sequential) 意味によって結びついている時にその関係を明示する (cf. Halliday & Hasan (1976)) \*9。
- 文頭に位置し (cf. 渡部 (1995)), それを含む文が先行文脈とのような意味関係にあるかを先触れし、読み手／聞き手のテキスト解釈を容易にする。

#### (統語・意味的特徴)

- 具体的な指示対象を持たない。
- その内部にソ系統の語を含み、かつ、それを省略した形も a. ~ c. の性質を持つならば、そのソ系統の語の有無で意味は変わらない。

(E) a. b. は表裏一体のもので、テキスト解読 (decoding) における接続詞の機能を規定したものである。他方、(E) c. は接続詞であるための必要条件である。なお d. は c. の統語現象への反映と見なせるものだが、全ての接続詞で検証できる訳ではない。

(E) c. d. の必要性は次のような例から分かる。

(15) 昨日新しい包丁を買った。(a)それで／(b) ϕで野菜を刻もうとした  
ら、切れすぎて指を切ってしまった。

(15) a. には「それ」が「(昨日買った) 新しい包丁」と照応する指示詞としての用法と、 そうではない接続詞の用法があるが、「それ」を省略した (15) b. には接続詞の読みしかない。これは、具体的な指示対象を持つ指示詞とそれを持たない接続詞の違いをよく表している (cf. 庵 (1995c))。

(E) a. ~ c. の内、「それが」の場合「それ」は省略できない\*<sup>10</sup>ので、議論に関与的なのは(E) a. ~ c. である。さらに、「そのNPが」も(E) a. b. は満たすので、両者を分けるのは(E) c. であることが分かる\*<sup>11</sup>。

以上の議論から、本稿の最初に掲げた、なぜ「それが」が「予測裏切り」という意味機能を持つのか、という問題の解答が得られた。即ち、「それが」は指示詞「その」が持つと同様の「テキスト的意味」を付与された接続詞であり、そのことの帰結として予測裏切り性を帯びるのである。

#### 2-4. 予測裏切り性を持つその他の接続詞

ここまで予測裏切り性を持つ接続詞「それが」を取り上げ、その性質が現れるメカニズムを見てきたが、予測裏切り性を持つ接続詞は「それが」だけではない。ここでは予測裏切り性を持つ他の接続詞について考える。

まず、第一は(16)(17)のような例における「それを」\*<sup>12</sup>である。

(16) 直接に手をかけていないものの、松本代行は文字通り、窪田さんを見殺しにしたことになる。刑法学者の板倉日大教授によると、その行為は共同正犯にあたるという。

「末端の信者が驚いて声が出なかったのならともかく、教祖夫人の松本代行はこうした行為を止められる立場にあるはず。それを（／それなのに）何もせずに見逃したのなら、黙示の現場共謀として殺人の共犯に問われる可能性もあります。(後略)」

(日刊スポーツ 1995. 6. 15)

(17) お重：だから、流行病で息子さん夫婦が亡くなっちゃったんだよ。

生まれたばかりの赤ん坊を残してさ。藤吉さん夫婦はその赤ん坊を引き取って一生懸命育てるんだよ。お金がいるのは当たり前だろ。それを（／それなのに）あんたって男は。

金太：済まなかった。知らなかったんだよ。藤吉つあん、すいませんでした。（「コメディーお江戸でござる」1995. 9. 14 放送分）

こうした例の「それを」は非指示的で（18）のような「そのNPを」に置き換えられる指示的な「それを」と比較されたい）、予測裏切り性を持つ。

(18) あんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ 熊本さ 熊本どこさ 船場さ 船場山には狸がおってさ それ（／その狸）を漁師が鉄砲で撃ってさ 煮てさ 焼いてさ 嘉ってさ…（「あんたがたどこさ」）

接続詞「それを」は基本的に「それなのに」に置き換えられるが、(17)のような相手を非難する文脈で多用され、その反映としてプロミネンスを伴うことが多い\*13。

ここまで「それが」「それを」が予測裏切り的関係を表すことを見てきたが、「それ+助詞」タイプの接続詞でこの関係を表すのはこの二つに限られる。これは、このタイプの接続詞が「そのNP+格助詞」と密接な関係にあることに由来すると考えられる。即ち、「が」「を」以外の格助詞ではそれ自体の意味が明瞭（城田（1993）の言う副詞格）であるので「予測裏切り」というその格助詞本来の意味以外の関係を表すのが困難なのである。

(19) A：田中が社長の娘と結婚するって話を聞いたか。

B：ああ。実はそのことで話したいことがあるんだ。（で=目的）

(20) 花子は長い間、亡くなった両親の代わりに兄弟の面倒を見るために一生懸命働き、そのために婚期を逸していた。その花子に今度素晴らしい縁談が持ち上がった。（に=あい方）

なお、(20)の「それ」が省略可能なタイプの中では「それなのに」「それにもかかわらず」が予測裏切り的関係を表す。

(21) 狹軌の鉄道の速度は、軌道の規格や状態にもよるが、時速六〇キロないし一〇〇キロぐらいが適當なように私には思われる。それ以上になるとスリルを感じ、以下になるとまだるっこしくなる。三〇キロ以下ではいらいらしてしまう。

それ（／ $\phi$ ）なのに、宮原線の運転士はハンドルを左手で軽く握ったままの姿勢で前方を見つめ、たまに右手で鼻の先を搔く程度で、じいっと二〇分を過すのである。（宮脇俊三「終着駅は始発駅」）

(22) 「高崎に停車しないなんてすごいでしょう」

「有力な政治家がいないからですか」

「いや、むしろ逆で、あの辺は中曾根や福田赳氏の地盤です。 $\phi$ （／それ）にもかかわらず、高崎に停まらない勇ましいのが一日二往復だけあります。これが、その一本。（後略）」

（宮脇俊三「途中下車の味」）

これは「なのに」（中の「のに」）「にもかかわらず」という部分が語彙的に予測裏切り的な意味を持っているため、「それが」「それを」の場合とはメカニズムが異なる。

### 3. まとめ

本稿では「それが」という形式に注目して日本語のテキストの構造の一側面を明らかにした。

「それが」は予測裏切り性を持つ接続詞だが、「それが」がこうした意味機能を持つのは、「それ」の部分にテキスト的意味の義務的な付与があるためである。そして、テキスト的意味の付与が義務的に行われるの、「それ」が、（定情報をマークする無標のマーカーである）「は」ではなく、格助詞「が」を伴うことによる。この意味で、「それが」は「そのNPが」と類似した機能を持つが、「それ」が非指示的であるために「接続詞」となっている（拙論（庵（1996印刷中））では「それ」を含む接続詞の諸相をより一般的な枠組みの中で説明しているので参照されたい。また、石垣（1944）、重見（1993）等で通時的な問題として論じられている、格助詞と

接続助詞の関係という問題も本稿の内容と関連性が高いものと思われる)。

さらに、「それを」もまた予測裏切り的な関係を表し得ることを指摘し、「それ+格助詞」の形式では「それが」「それを」のみが予測裏切り性を表すことの理由をガ格、ヲ格が文法格 (cf. 城田 (1993)) で具体的な意味を持たないという点に求めた<sup>\*14</sup>。

#### 付記

本稿をなすに際し、J. V. ネウストプニー先生、並びに、安達太郎、岩崎卓、高梨信乃、日高水穂、前田直子、三宅知宏の各氏から貴重な御意見を頂いた。記して心から感謝致します。

#### 注

\* 1 本稿は1995年度関西言語学会ワークショップ (1995. 11. 11. 於: 大阪外国语大学) で口頭発表した内容を加筆・修正したものである。

\* 2 (ア)のように取り立て詞の「さえ」や「も」でマークされることもある。

(ア)ノーベル物理学賞を受賞したことがある米国のフィリップ・アンダーソン教授がいっている。「プリンストン大学には、国防総省の援助で長年、軍事科学を研究してきたグループがある。その(／#この／??φ)彼らでさえ、ひそひそ話ではSDI(いわゆるスター・ウォーズ計画)は実現できそうもないといっています」。(天声人語 1986. 7. 4)

\* 3 一方、「この」は、先行詞を「トピックとの関連性」という観点から捉えていることを示すマーカーである (cf. 庵 (1995a, 1995b))。

\* 4 前田 (1995a) は接続助詞ノニの意味を「話者が食い違いを認識していること」と規定し、(イ)のような逆接的な場合と、(ウ)のような対照的な場合を各々、「原因と結果との食い違い」「二つの事態の背向の食い違い」として包括的に捉えている。本稿で「それが」等の分析に用いる「予測裏切り」という概念と前田 (1995a) の「食い違い」という概念には密接な関係があると思われる所以、本稿でも対比と逆接の関係については前田 (1995a) の説に従い、機能的には両者を特に区別しない(イ)ウは共に前田 (1995a) より)。

(イ)薬を飲んだのに、治らなかった。

(ウ)他の言葉はろくに言えないのに、自動車の型はすぐ覚えた。

\* 5 (9)を「今朝、太郎が／は朝ごはんを食べなかった」のように否定になると一般知識とのずれが生じて、発話の動機付けが高まる。なお、(9)も小説の冒頭のように何らかの語り (narrative) を始めるためにその談話の参与者をテキストに導入する場合にはこうした制約を受けず自然に用いられる。

\* 6 これに関して、丹羽 (1988) は、(2)B の「来る」にはその場で判断を下す場合と既得知識を述べるだけの場合 (「多分」等が共起できるのは前者のみ) があるとし、「有題文」((2)では略題文だが)が常に「判断」を表すわけではないとしている。これが正しいとすれば、(10)のような総称文は発話時に「判断」が行われる可能性が最も少ないタイプの文であることになる。こうした文が発話される可能性の低さはこの点からも説明できるであろう。

(2)A : あした太郎来るの？ B : うん、来るよ。

\* 7 接続詞は抑も必須要素ではない。これに関して金田一 (1988:140) は「もし、一日中、何か品詞一つを使わないでしゃべったら一〇〇万円を出そう、と言われたら、他の品詞ではだめだが、接続詞なら筆者は応ずる自信がある」と述べている (三宅知宏氏の御指摘による)。また、井上 (1984:74ff.) には、一般的文章読本が接続語句の使用を抑えるように説いている等の興味深い記述が見られる。重要なのはそうした非必須要素の中にも接続機能の違いに応じて省略可能性の多寡が存在するということである。

\* 8 (1)のように「この」の使用が義務的になる場合もあるが、これは先行詞と定情報名詞句の意味関係 (言い換えの有無) によるもので、(狭義の) 文脈的理由によるものではない。また、(2)のようにトピックとの関連性の高さ (狭義の文脈的理由) のために「その」が使えない場合もあるが、この場合は通常「ゼロ」も可能であり、「この」の使用は義務的ではない (cf. 庵 (1995a))。

(1) 私は紅茶が好きだ。この／#その／#ϕ飲物はいつも疲れを癒してくれる。

(2) 名古屋・中村署は、殺人と同未遂の疑いで広島市内の無職女性(28)を逮捕した。調べによると、この (／#その／ϕ) 女性は 20 日午前 11 時 45 分ごろ名古屋市内の神社境内で、二男(1)、長女(8)の首を絞め、二男を殺害した疑い。(日刊スポーツ 1992. 11. 22)

\* 9 これは、接続詞が複数の文連鎖間の意味関係を規定しているのではなく、複数の文連鎖間に何らかの意味関係が存在する時にその関係を明示するために接続詞が用いられるのである、と主張するものである (同趣旨の発言が浜田 (1991:42) にある)。この意味で、同じく結束装置 (cohesive device) と言っても、それ自体

が自らの解釈を他の部分に依存し、それによりテキストに結束性 (cohesion) をもたらす指示詞と、接続詞は機能が異なる。

\*<sup>10</sup> 表層的には「が」は「それが」の「それ」を省略したものに見えるが、(a)から分かるように「それが」と「が」にはニュアンスの違いがあるし、(多くの場合)(c)のように統語的にも「が」に「それ」を加えられない。一方、(c)から分かるように「それで」等の(B)d. を満たす接続詞の場合はこの操作は自由にできる。従って、本稿では「が」は「だが」の省略形であり、「それが」の省略形ではないと考える(!は意味が変わることを表す)。

- (a) [スチーブンスは]一時は「だめ助っ人」のらく印さえ押されていた。それ (／!  $\phi$ ) が、[現在] 6 試合連続安打中。(朝日新聞朝刊 1994. 5. 20)
- (c) 東京都調布市といえば、名物・深大寺そばが有名だ。 $\phi$  (／#それ) が、ひょっとしたら数年後の観光名物は、W杯ラーメンやヴェルディ煎餅になっているかもしれない。(AERA 1993. 5. 25)
- (e) 「なぜ、一般競争入札が駄目なのか」との質問に、建設省は、「(中略)工事中に倒産したり、途中で投げ出すケースを防ぐ必要もある。 $\phi$  (／それ) で、信頼できる業者を選定したい。外国を見ても、何らかの事前審査制はある」と強調する。(AERA 1993. 5. 25)

\*<sup>11</sup> (テキスト的意味の付与が義務的な) 指示詞「それが」と接続詞「それが」は (c)(e)のような例を介して連続している。

- (c) ブナは「森の母」であり、ブナの森は「命の森」である。命の森は、1万年、いやそれ以上の昔から私たちの祖先の木の文化をささえてきた。それがわずか数十年で急速に姿を消している。(天声人語 1986. 8. 24)

(指示詞:「それ」が「ブナの森」を指し得る)

- (e) 太郎君の父長靖さんは 16 年前の冬、吹雪の尾瀬で凍死した。尾瀬自動車道の建設中止に力をそいだ長靖さんは、小屋を継ぐことを嫌い、悩み続けたことがある。それがいつか、尾瀬にひきつけられていく。(天声人語 1987. 5. 25)

(接続詞:「それ」が「長靖さん」を指し得ない)

(e)のような時に「それ」が非指示的になるのは、レ系指示詞で人を指すと失礼になる、という近藤(1992)の言う運用論的制約が先行詞が固有名詞の時全体に拡張された結果ではないかと思われる ((B)b. で見たように、テキスト的意味の付与が義務的な時の先行詞は固有名詞であることが多い)。

\*<sup>12</sup> このタイプの「それを」が接続詞であるか否かは次のような「二重ヲ格制約

(double-o constraint)」(cf. Harada (1973)) に基づくテストで確かめられる(山口大学の和田氏(個人談話)の御教示による)。なぜなら、もし(a)の「それを」が指示詞ならば、(b)「こうした行為を」が存在するために、(e)は二重ヲ格制約によって排除されるはずだからである。

(e) 「末端の信者が驚いて声が出なかったのならともかく、教祖夫人の松本代行はこうした行為を止められる立場にあるはず。(a)それを何もせずに(b)こうした行為を見逃したのなら、黙示の現場共謀として殺人の共犯に問われる可能性もあります。」(cf. (6))

\*13 次のような例は(「ケーキ」と照応する)指示詞とも、接続詞とも解釈できるが、「それを」にプロミネンスを置くと接続詞の解釈が極めて強くなる。

(s) 太郎は花子のために暑い中並んでケーキを買ってきました。それを花子は開けて見もせずにゴミ箱に捨てた。

\*14 ただし、次のようなヲ格は副詞格である可能性がある(岩崎卓氏の御指摘による)。こうした問題を含め通時的な観点からの研究も必要だが(cf. 石垣(1944), 金水(1993), 山口(1986), 重見(1993), Horie(1993)等), これについては今後の課題としたい。

(e) 折角の幸運をこのまま埋もれるのは嫌だ。(寺村(1982))

### 参考文献

庵 功雄 (1995a) 「テキスト的意味の付与について」『日本学報』14 大阪大学  
 ——— (1995b) 「コノとソノ」宮島・仁田編(1995) 所収  
 ——— (1995c) 「ソノNとソレ」宮島・仁田編(1995) 所収  
 ——— (1995d) 「定情報のマーカーとそれをマークする助詞との相関について」  
 1995年度日本語文法談話会発表要旨  
 ——— (1996印刷中) 「指示と代用」『現代日本語研究』3 大阪大学  
 石垣謙二 (1944) 「主格「が」助詞より接続「が」助詞へ」『助詞の歴史的研究』  
 岩波書店  
 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版  
 井上ひさし (1984) 『自家製文章読本』新潮社  
 金水 敏 (1993) 「古典語の「ヲ」について」『日本語の格をめぐって』くろしお  
 出版  
 金田一春彦 (1988) 『日本語 新版(下)』岩波新書  
 近藤泰弘 (1992) 「レ系指示詞の意味論的性格」『文化言語学』三省堂

重見一行 (1994) 『助詞の構文機能研究』和泉書院

城田 俊 (1993) 『文法格と副詞格』『日本語の格をめぐって』くろしお出版

寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

—— (1987) 「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』6-3

仁田義雄 (1977) 「「文の文法」から「文を越える文法」へ」『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社

丹羽哲也 (1988) 「有題文と無題文、現象（描写）文、助詞「が」の問題（上）」『国語国文』57-6 京都大学

野田尚史 (1985) 『日本語セルフマスターシリーズ 1「は」と「が』』くろしお出版

浜田麻理 (1991) 「「デハ」の機能」『阪大日本語研究』3 大阪大学

—— (1993) 「ソレガについて」『日本語国際センター紀要』3 国際交流基金  
日本語国際センター

—— (1995) 「トコロガとシカシ」『世界の日本語教育』5 国際交流基金

前田直子 (1995a) 「逆接を表わす「～のに」の意味・用法」『東京大学留学生センター紀要』5 東京大学

—— (1995b) 「ケレドモ・ガとノニとテモ」宮島・仁田編 (1995) 所収

三上 章 (1955) 「代名詞と承前詞」『現代語法新説』くろしお出版から復刊

宮島達夫・仁田義雄編 (1995) 『日本語類義表現の文法（複文・連文編）』くろしお出版

山口亮二 (1986) 「助詞「を」の接続表現」『国語国文』46-5 京都大学

渡部 学 (1995) 「ケレドモ類とシカシ類」宮島・仁田編 (1995) 所収

レー・バン・クー (1988) 『「の」による文埋め込みの構造と表現の機能』くろしお出版

Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. Longman

Harada, S. -I. (1973) "Counter Equi-NP deletion". *Annual Bulletin* 7 Tokyo University, pp. 113-147.

Horie, K. (1993) "From zero to overt nominalizer NO: a syntactic change in Japanese" *Japanese Korean linguistics* 3 SLA Stanford, pp. 305-321.

Sperber, D. & Wilson, D. (1986) *Relevance*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts (内田聖二他訳 (1993) 『関連性理論』研究社出版)